島根医科大学紀要，第18巻，1～15頁，1995年12月

ゲーテと読者

── 詩《好意ある人々に寄す》を巡って ──

（ゲーテ／読者／詩）

栗花落　和　彦*

Goethe and the Reading Public

── On His Poem "An die Günstigen" ──

(Goethe／the reading public／poem)

Kazuhiko TSUYU*

I．詩人と読者

沈黙を好まぬ詩人達は
世の人々の前に　自己を現わそうとする
賞賛と非難は　避けがたいものだ！
散文で告白するのは　誰しも好まない
だが　私達はしばしば　薔薇の花に隠れ
詩神達の静かな杜の中で　心を打ち明ける

私が迷い　努め
悩み　生きたことは
ここで　初めて花束となった花々なのだ
そして　老齢も青春も
そして　欠点も美点も
リートに歌えば　引き立つものだ

Dichter lieben nicht zu schweigen,
Wollen sich der Menge zeigen.
Lob und Tadel muß ja sein!
Niemand beichtet gern in Prosa;
Doch vertraun wir oft sub rosa
In der Musen stillem Hain.

Was ich irrte, was ich strebte,
Was ich litt und was ich lebte,
Sind hier Blumen nur im Strauß;
Und das Alter wie die Jugend,
Und der Fehler wie die Tugend
Nimmt sich gut in Liedern aus.

六行二連から構成された〈トロヘーウス（強弱格）Trochäus〉調のゲーテの詩《好意ある人々に寄す》[1]をそれ自体完結し自立した作品と見做すことはもちろん可能であり，詩を解釈する際の一般的に望ましい基本的な接近方法であるが，この詩を一層良く理解するためには，創作当時のゲーテと読者の関係を充分に知っておくことがとりわけ必要不可欠な前提となるものと思われる。従ってこの両者の関係を可能な限り解明することが本章の主題であるが，その前に先ず彼自身の編纂による全集の詩の巻の成立過程を辿りながら，この詩の成立について触れておきたいと思う[2]。

1．生涯に亙って五回の全集を刊行したゲーテは，《イタリア紀行 Italienische Reise》（1786年9月－1788年4月）滞在中の1787年から帰国後の90年にかけて最初の《ゲーテ著作集 Goethes Schriften》（全八巻　ライプツィヒ　ゲッシェン書店発行）を刊行した。詩集は〈雑詩集 Vermischte Gedichte〉と題されて，最終の第八巻(1789年)に収載されている。ゲーテ自身これをふたつに区分して，第一集にはリート形式の〈恋愛抒情詩 Liebeslyrik〉および幾つかの〈バラーデ Balladen〉を，第二集には〈自由韻律 Freie Rhythmen〉形式の詩および幾つかの〈エピグラム Epigramme〉そしてフランクフルト時代の〈芸術家の詩 Künstlergedichte〉から精選したもの，更には中世ニュルンベルクの靴屋の親方にして職匠詩人であるハンス・ザックス(Hans Sachs: 1494-1576)を取り上げた《ハンス・ザックスの詩的使命 Hans Sachsens poetische Sendung》（1776年）および宗教叙事詩《秘儀 Die Geheimnisse》（1785年）を収載している。

2．1792年から1800年にかけて刊行された二回目の《ゲーテ新著作集 Goethes Neue Schriften》（全

* ドイツ語教室　Department of German

七巻 ベルリーン ウンガー書店発行）では，詩集は前回と同じく最終の第七巻(1800年)に収載されており，以下の七つの詩群に分類されている。

1〈リート集 Lieder〉(1789-1800年に成立したもの)
2〈バラーデおよびロマンツェ Balladen und Romanzen〉
3〈悲歌Ⅰ Elegien Ⅰ〉(《ローマ悲歌 Römische Elegien》のこと)
4〈悲歌Ⅱ Elegien Ⅱ〉
5〈ヴェネツィアのエピグラム 1790年 Epigramme, Venedig 1790〉
6〈バーキの予言 Weissagungen des Bakis〉
7〈四季 Vier Jahreszeiten〉

そして詩篇〈リート集〉の序詩としてその冒頭に掲げられた詩《好意ある人々に寄す》は，ゲーテ自身の日常生活や恋愛体験および自然に関する深い経験などを痛切な契機として創作されたのではなく，《ゲーテ新著作集》を購入する「好意ある」読者に予め訴え掛けるという明瞭な意図の下にあくまでも創作されて詩巻の中に置かれたその構成から見て，詩巻を刊行する直前の1799年8月頃に成立した作品と見做されている。同年7月31日ゲーテは，《ゲーテ新著作集》第七巻の詩集の中に新しい詩を収録してほしいというベルリーン在住の出版者ウンガー(Johann Friedrich Gottlob Unger: 1753-1804）の要請を受けて，イルム河畔にあるガルテン・ハウス(Gartenhaus)に引き籠もり，可能な限り誰にも邪魔されることなく詩集編纂の仕事に没頭するため，9月15日まで滞在することになった。8月3日ゲーテが〈ドイツ古典主義 Deutsche Klassik〉の盟友シラー(Friedrich von Schiller: 1759-1805）に宛てて書き送った書簡は，詩集をひとつの纏まった全体として提示するための「精神の集中と落ち着き」そしてとりわけ「ある種の普遍的な気分 eine gewisse allgemeine Stimmung」の必要性を強く訴えるとともに，この〈リート集〉を編纂した頃のゲーテの状況，とりわけ読者に対するゲーテの姿勢を伝えている[3]。

> 私は庭園内での自分の孤独をとりわけ，ウンガーが今や第七巻に入れるようにと要求した私の小さな詩群を一層綿密に編集して清書させることに向けています。このような編集作業に必要なのは，精神の集中と落ち着きそしてある種の普遍的な気分です。もし私がなお二，三〇の新しい詩をそこに付け加えて一定の隙間を埋め，非常に貧弱なものとなっている一定の項目を豊かなものとすることが出来るなら，相当興味深い全体が生じ得るところでしょう。しかし私は読者（das Publikum）を考慮に入れる余裕を見出せない以上，せめて自分自身に対しては誠実に振舞いたいものと思っていますので，自分が丁度今のところはなし得ないとしても，いつかはなさねばならないことを少なくとも確信しています。それは将来に対して導きとなる様々な指標を与えてくれるものなのです。

読者に関するゲーテのこの発言は，最初から読者を想定して読者の要求に寄り添った作品を創作するのではなく，自己に対する誠実な内面的欲求から産み出された作品を結果として読者に提示しようとする詩人の姿勢を率直に物語るものであろう。この見解に応じてシラーは早速8月6日イェーナから次のような返信を書き送り，ゲーテの詩集の構成上の過不足に対する全体的な見通しを披瀝し，詩集の売れ行きについての希望的観測で締め括っている[4]。

> あなたがご自分の詩群に取り組まれたこと，そしてこの詩集が今や印刷の運びとなっていることを耳にして，私は嬉しく思います。たとえ詩集があなたご自身の高次な要求に添って完成されないとしても，なお分量が足りないのは，私の知る限りでは〈書簡 Episteln〉と〈バラーデ Balladen〉の分野のみです。しかし〈悲歌 Elegien〉と〈エピグラム Epigramme〉と〈リート集 Lieder〉はそれだけ一層分量豊かに確保されています。望むらくは，あなたの〈リート〉のどんなものでも，たとえそれがもっと大きな作品の中で現われるものだとしても，詩集の中に全て取り入れるというご決意を捨てないで頂きたいのです。たとえ詩集があなたご自身の高次な要求に添って完成されないとしても，それは豊かで好ましい詩集となることでしょう。そして今行なわれないことは，また別の時に着手することが出来ます。このような作品は，そうでなくとも三年から四年のうちに売り切れてしまうのですから。…

このようにゲーテがシラーに励ましを受けたことと相俟って，詩《好意ある人々に寄す》は早くも9月24日，出版者ウンガーに引き渡されることになった。

3．1806年から10年にかけて刊行された三回目の《ゲーテ全集 Goethes Werke》（全十三巻 テュー

ビンゲン　コッタ書店発行)では，詩集は最終巻ではなく第一巻（1806年）に初めて収載され，詩人としてのゲーテの存在を浮き彫りにしている。ゲーテは前二回の全集の詩を纏め直し，1800年以降に創作した詩を増補して前回の全集の詩群に従った分類を保持し，更に〈雑詩集 Vermischte Gedichte〉および〈書簡 Episteln〉を付け加えている。

4．1815年から19年にかけて刊行された四回目の《新ゲーテ全集 Goethes Werke》（全二〇巻　シュトゥットガルトおよびテュービンゲン　コッタ書店発行）では，詩集は第一巻および第二巻（1815年）に分割して収載されている。この詩集では，新たに創作された詩のみならず，これまで未公表の若き日々の詩も含まれており，以下の十九の詩群に分類されている。

1〈リート集 Lieder〉
2〈集いの歌 Gesellige Lieder〉
3〈バラーデ Balladen〉
4〈悲歌 Elegien〉
5〈書簡 Episteln〉
6〈エピグラム Epigramme〉
7〈バーキの予言 Weissagungen des Bakis〉
8〈四季 Vier Jahreszeiten〉
9〈ソネット Sonette〉
10〈カンタータ Kantaten〉
11〈雑詩集 Vermischte Gedichte〉
12〈ヴィルヘルム・マイスターより Aus Wilhelm Meister〉
13〈古代形式に近付きつつ Antiker Form sich nähernd〉
14〈人々に寄す An Personen〉
15〈芸術 Kunst〉
16〈比喩的に Parabolisch〉
17〈神と心情と世界 Gott, Gemüt und Welt〉
18〈格言風に Sprichwörtlich〉
19〈エピグラム風に Epigrammatisch〉

この四回目の詩集では，本来宗教叙事詩《秘儀》の序詩として1784年に創作された後，最初の《ゲーテ著作集》の第一巻（《若きヴェールターの悩み Die Leiden des jungen Werthers》収載）の冒頭に掲げられていた八行十四連の詩《献詩 Zueignung》が詩集の巻頭に移され，更に〈リート集〉の冒頭には四行三連の序詩《予めの訴え Vorklage》（1814年）が掲げられたため，詩《好意ある人々に寄す》は詩集全体としては三番目に，〈リート集〉の中では二番目に位置することになった。これ以後に編纂された《ゲーテ全集》ではこの方式が基本的に踏襲されている。尚，〈註解と論考 Noten und Abhandlungen〉を付して1819年に成立した一巻本の《西東詩集 West-östlicher Divan》は，ゲーテが個別に刊行した唯一の連作詩集である。

5．1827年から30年にかけて刊行された五回目の《最後の手による決定版ゲーテ全集 Goethes Werke. Vollständige Ausgabe aus letzter Hand》（全四〇巻　シュトゥットガルトおよびテュービンゲン　コッタ書店発行）では，詩集は最初の四巻（1827年）に分割して収載され，第一・第二巻は前回の《新ゲーテ全集》の配列を踏襲しており，第三・四巻には以下の十の新たな詩群が増補され，第一・第二巻と同じ表題が一部重複して採用されている。

1〈抒情的なもの Lyrisches〉
2〈集い Loge〉
3〈神と世界 Gott und Welt〉
4〈芸術 Kunst〉
5〈エピグラム風に Epigrammatisch〉
6〈比喩的に Parabolisch〉
7〈外国語より Aus fremden Sprachen〉
8〈温和なクセーニエ Zahme Xenien〉
9〈碑銘 Inschriften〉
10〈追想書簡 Denk- und Sendeblätter〉

このようなゲーテ自身の編纂による一連の全集とりわけ詩集が全体的な纏まりのあるものとしての完成を目指しながらも，結局のところ最終的な完成には至らなかった主要な原因について，トゥルンツ(Erich Trunz）は生涯に亘る〈生産的な抒情詩人〉としてのゲーテの存在を力説し，その本質を「創造する者にして変貌を遂げて行く者 ein Schaffender und Sich-Wandelnder」――この姿はギリシアの最高峰オリュンポス(Olymp）山の十二神のひとりにして変身の神ヘルメス(Hermes)を彷彿とさせるものである――と規定して，〈ドイツ古典主義〉の真の体現者たらんとするゲーテの真摯な創作努力の在り様を指摘している[5]。

> ゲーテは生涯に亘って何度も詩群を組み替えてしまった後，恐らく《最後の手による決定版》における配列もまた最終的なものとは感じなかっただろう。というのも彼は遺稿から幾多の詩が付け加わるであろうということを考慮に入れていたからである。彼は死に至るまで抒情詩人（Lyriker）

として生産的（produktiv）であった。抒情詩人として生産的であるというこの事実――年老いて行く詩人に対するかくも稀有なこの賜物――は恐らく，なぜ彼が一度も自分の全抒情詩を秩序付けたことがないのかということの一方の原因である。というのは，全体的なものとして秩序付けられ得るのは，完成して纏まりのあるものだけなのであるが，彼は最後まで創造する者にして変貌を遂げて行く者であったからである。他方の原因は，彼が自分の詩群の多くを手許に保存しておいたということである。というのは彼は，それらの詩が自分の時代では公表するには相応しくないと思ったからである。彼の抒情的作品について全体的に見通すことは，あくまでも後世の人々にとっての課題であった。

このように抒情詩人ゲーテが第一回目の《ゲーテ著作集》を編纂するに際して充分念頭に置き，この時初めて「彼の抒情的作品について全体的に見通すこと」になった読者――詩《好意ある人々に寄す》に即して言えば「世の人々」――とは，実際どのような人々と見做されていたのであろうか。ゲーテの目に映った当時の読者の姿を，《ゲーテ著作集》刊行時の前後に遡って探ってみたいと思う。

読者に対するゲーテの態度はもともと好意的なものとは言えなかった。ゲーテがまだ若かった時代の支配的な趨勢である〈啓蒙主義 Aufklärung〉が視野に置いた広範な読者層の多くは，あらゆる作品から常に教訓的なものだけを読み取ることに慣れ切って，芸術性とは縁遠い道徳や功利性を専ら求めており，理性による真の意味における全人間的な〈啓蒙〉の認識状況は実のところ希薄であった。ゲーテが《ファウスト》第一部において過去の鬱蒼とした学問と書物の世界にのみ閉じ籠もる暢気な助手ヴァーグナーの無反省で狭隘な態度と，魂を乖離させて現在の生の抜き差しならない苦悩に陥っているファウストの存在そのものとを対比させて，人々が〈啓蒙主義〉の風潮に唯々諾々と押し流される存り様を鋭く剔抉したように[6]，人間的叡知に裏打ちされた真理という〈啓蒙〉の光を追求する志の高い人々はあくまでも少数に留まっていた。例えば，1780年8月14日ゲーテはブラウンシュヴァイク在住の法律顧問官ライゼヴィッツ（Johann Anton Leisewitz: 1752-1806）を相手に，「ドイツ国民が気分を感じることの無能さ」について語り合った時，「彼等に一輪の花を見せると直ぐに，それは香りがするか，それはお茶にして飲むことが出来るか，それは模造してもよいか，と彼等は問うのだ」と語り，自然をその本然の姿のままに受容しようとしないドイツ国民の偏狭な実用主義的態度に辛辣な批判を向けている[7]。更に言えばこの発言は，古代ギリシアやフランスで隆盛を極めた詩と劇の翻訳やそれらを模範とする翻案物，およびイギリスで成立した書簡体小説などの模倣に甘んじていた当時のドイツの文学世界の趨勢に対する現状批判と受け取ることも出来よう。ゲーテ自身は1775年カール・アウグスト公（Herzog Carl August: 1757-1828）の強い要請によってヴァイマル公国に招聘された最初の十年間詩人および作家として沈黙を守った後，1786年から88年にかけて形態の定まらない母国ドイツから形式豊かな南国イタリアへと逃れ，その《イタリア紀行》において〈死して成れ Stirb und werde!〉[8]という自己の死と再生の豊饒な経験を果たして，自然と芸術の領域において主観と客観の総合を重んじる〈古典主義〉の詩人へと大きく変貌を遂げており，ヴァイマルの多くの友人達にとっては解明し難い謎めいた人物と化している。そうしたゲーテが1787年から90年にかけて刊行した最初の《ゲーテ著作集》は，彼の個別的作品に親しんでいた読者との中断されていた関係を今改めて全体的に取り戻そうとする真摯な試みのひとつであった。しかしこの出版の直接的な契機としては，その当時ベルリーン在住の悪名高い出版者ヒンブルク（Christian Friedrich Himburg: 1733-1801）がゲーテの承認を全く受けないで刊行した海賊版の銅版画入り《ゲーテ著作集 Goethens Schriften》（全三巻 1775-76年，第二版 1777年，第三版 1779年）を始めとする十種類もの著作集が世間に流布していた事実が挙げられる。この海賊版《著作集》は歴史哲学者にして詩人であるヘルダー（Johann Gottfried von Herder: 1744-1803）の論文や哲学者ヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi: 1743-1819）の詩などが混在し，誤植が多いだけでなく，ゲーテの南ドイツ特有の言葉遣いを北ドイツの読者向けに改竄した極めて杜撰なものであったらしいが[9]，1786年7月12日のヤコービ宛ての書簡では，《著作集》の出版に対して乗り気でないゲーテの様子が垣間見られる[10]。

…今私が少々苦痛なのは，自分の著作集を出版しなければならないことだ。各々の心情をもって個々の事情の下で取り組んだ事柄を読者に委ねよと言われることは，私には以前から不愉快な気持がしていた。でも私にはどうすることも出来ない。

本来は声に出して歌われるべき詩群がもの言わぬ冷たい活字に印刷されて文学作品としての詩集の中に閉じ込められてしまい，「各々の心情をもって個々の事情の下で取り組んだ」詩の持つ生き生きとした現在性が閑却されかねない危険性は，抒情詩人ゲーテにとって極めて耐え難い事態であったろう。とはいえ，マンデルコフ（Karl Robert Mandelkow）は《著作集》におけるゲーテの編集努力を高く評価し，その努力と《イタリア紀行》を生涯における決定的な転換期としたゲーテの世界観の変貌とを重ね合わせている[11]。

> …この《著作集》の中に収載されている青年期の文学の配列，選択および改訂の傾向を見るだけでも既に，ヴァイマルの宮廷における彼の活動の内面的な自己発展に向けられた最初の十年間の孤独を打破して，［イタリアで］新たに獲得された見解と規範とに相応しい一変した方法で，そしてこれまでに成し遂げられたものに自己を照らす形で，読者に自己を開陳しようとする努力が示されている。

一般的に劇や小説が作者からある一定の距離を保つことによって作品自体の客観的な構造を組み立て，その構造を読者に保証すると考えられるのに反して，詩――とりわけ抒情詩――においては，読者が詩人を作品内部の〈私 ich〉と直接結びつけ両者を安易に同一視してしまう傾向にあるが，ゲーテもまたこのような事情を十分配慮して，青年期のあまりに主観過剰で個人的な作品を《著作集》から極力排除するように努めている。それのみならず，〈疾風怒濤 Sturm und Drang〉時代の彼の代表作であり自殺者まで続出させるほどの多大な反響を呼び起こした《若きヴェールターの悩み》第一版（1774年）がその筆致を幾分弱めて増補改訂した第二版（1787年）の形とはいえ第一巻に真っ先に収載され，詩集が最終の第七巻に収載された《著作集》の構成そのものからも容易に看取されるように，ゲーテは〈疾風怒濤〉時代既に紛れもなく抒情詩人であったという事実よりも，書簡体小説《ヴェールター》の作家としての自己の存在をあくまでも前面に強く押し出している。そしてまたゲーテは《著作集》全体の序詩として第一巻の冒頭に掲げた詩《献詩》（1784年）の中で，「汝は　早くも充分なる超人と思い込み／男子の義務を果たすのを等閑にしている So glaubst du dich schon Übermensch genug,／Versäumst die Pflicht des Mannes zu erfüllen!」（第8連5-6行目）と呼び掛けられる傲岸不遜な〈私 ich〉に対して，「お前はどれほど他の人々と異なっているのか？／己れを知り　世界とともに平和に生きよ Wie viel bist du von andern unterschieden?／Erkenne dich, leb' mit der Welt in Frieden!」（同7-8行目）という風に，青年期における〈巨人主義 Gigantismus〉から円熟期における自己と世界との調和への脱却，つまりは〈諦念 Entsagung〉を語り掛ける詩の女神たる〈気高い存在 das hohe Wesen〉（第10連1行目）の戒めの言葉に仮託して，詩人と読者との望ましい新たな関係を，他ならぬ詩の女神によって課せられた一種の義務として方向付ける（第9連1-8行目）[12]。

> 「お赦し下さい」　私は声を上げた　「私の善意から発したことなのです
> 空しく　両の目を見開いておくようにと　おっしゃるのでしょうか
> 喜ばしい意志が　私の血の中に息づいています
> 私は　あなたの賜物の価値を知り尽くしています
> 他の人々のために　私の心の中には　気高い宝が成長しています
> 私は　あなたの賜物［である才能］を　もはや隠すことは出来ないし　隠すつもりもないのです！
> どうして私は　こんなに思い焦がれて　道を求めたのでしょう
> その道を同胞達に示すようにと　あなたに命じられなければ」
>
> „Verzeih mir", rief ich aus, „ich meint' es gut!
> Soll ich umsonst die Augen offen haben?
> Ein froher Wille lebt in meinem Blut,
> Ich kenne ganz den Wert von deinen Gaben.
> Für andre wächst in mir das edle Gut,
> Ich kann und will das Pfund nicht mehr vergraben!
> Warum sucht' ich den Weg so sehnsuchtsvoll,
> Wenn ich ihn nicht den Brüdern zeigen soll?"

このようにゲーテは，結果の如何を問わない無頓着で傲慢とも言える若き〈疾風怒濤〉時代の主観的な方法から，自分の作品が呼び起こすであろう様々な反響に注意深く耳を澄ます時熟した〈古典期〉の客観的な方法へと変貌を遂げる。しかし読者を新たに獲得するために用意周到な準備の末に刊行された《著作集》に寄せるゲーテの期待は，部分的にしか満たされることは

なかった。ゾマーフェルト（Martin Sommerfeld）は具体的に数字を挙げて，実際に印刷された《著作集》の発行部数の非常な高さ(4000部)に反比例する売れ行きの不振(626部――予約申し込み者の名簿は358名)を検証し，「この版は新しいものがほんの僅かしかなく，未完成で中途半端な出来のものが幾つか見込まれていたので，あらゆる点から見て異常と言える出版上の無謀な企てであった」と断定して，極めて不満足に終わった売れ行きの三つの理由を分析している[13]。出版者の出版上および商業上の経験不足と取引関係の不慣れ，各巻の完成と発行おける異常なほどの遅滞，そしてフランス革命の勃発とその経過における一般的な経済上の麻痺状態および読者がこの大事件に忙殺されたこと，であった。更に彼は，「啓発されるところの多いのは…，この場合予約者名簿の分析であるが，これによっても十八世紀の文学読者の構造について上述したことは裏書きされる」と述べ，その注目に値する一例として当時の政治的支配者層の予約者数を挙げている。この中の大部分はヴァイマル宮廷の人々およびゲーテと個人的に親しい王侯貴族達を含んでいるとはいえ，予約者数は22名，部数は26部に過ぎない。このように読者がゲーテを受け入れなかったことは有形無形の圧力となって，彼の孤独の意識を強めて行く要因となったものと思われる。もともとイタリアから帰国後のゲーテの心を色濃く染めていた孤独の意識は，読者に対する失望が募るとともに一層深まって行ったのである。1790年2月28日作曲家ライヒァルト（Johann Friedrich Reichardt: 1752-1814）宛ての書簡で，「我が国の読者は芸術というものをまるで理解していません。…ドイツの人々は平均的に誠実で実直な人間達ではありますが，芸術作品の持つ独創性，虚構，性格，統一および完成というものを少しも理解しておりません。つまりひと言で言えば，彼等には審美眼がないのです」と断じるゲーテの見解は，イタリアから帰国して以来初めて読者に対する彼の態度が変化したことを示す辛辣な批判でもあり，読者に深く絶望した詩人の言葉でもある[14]。更にまた，流行作家でないことを痛切に自覚しているゲーテは1791年7月4日ライプツィヒ在住の出版者ゲッシェン（Georg Joachim Göschen: 1750-1828）に宛てて，《著作集》の出版に対する悲観的な見通しを語っている[15]。

> …他の作家のものであれば，もっと多くの読者が好きになることでしょうが，あなたご自身がおっしゃる通り，私の作品は他の作家のものほどには流行しておりませんので，私はもちろんその事情に従って仕事に取り掛かる他ありませんし，私の将来の著作集の出版が完全に分散されるであろうことを，遺憾ながら予測しております…。

前述のヤコービ宛ての書簡からも推測されるように，もともとゲーテには，無数の一般読者を対象とした《著作集》を出版するという意志は希薄であり，自分が創作した詩を少数の親しい知人達の面前で朗読することで満足していた節が多分に見受けられる。ゲーテ自身が抱いていた望ましい読者の姿を，トゥルンツはこう要約している[16]。

> …ゲーテがとりわけ頭に思い描いていたのは，彼の個人的で，各地に点在する重要な知人仲間であった。この知人達に彼は心を打ち明けたいと思った。彼の詩は，個人的な親密さと社交性の間を揺洩している。

それにもかかわらず《著作集》を敢えて出版する運びとなったのは，ゲーテの詩の朗読に耳を傾けた周囲の友人達が一般読者に対しても作品を広く公開してほしいと要求したこと，海賊版の《著作集》が世間に横行し出した事態をゲーテ自身看過してはおけなくなったこと，というこのふたつの要因が重なり合ったからである。しかしこの《著作集》が実際売れ行き不振に終わったことによって，一般読者に寄せるゲーテの期待感はあくまでも期待感だけに留まり，彼は読者に対する不信の念を一層募らせて行く。ケスター（Albert Köster）は一般読者に対するゲーテの絶望的な思いを次のようにはっきりと断定している[17]。

> 量としての読者（das Publikum als Masse）をゲーテは軽蔑している。彼はそれどころか生涯の終わりに至るまで個々の経験が増すに連れてますます，この思いを強めて行かざるを得なかった。彼が再びドイツで過ごした最初の十年の間になお時折り，激情が彼を打ち負かすことがあった。どれほど辛辣に彼が《ヴェネツィアのエピグラム Venetianische Epigramme》の中で語り得たか，そして1796年になっても悲歌《ヘルマンとドロテーア Hermann und Dorothea》の中で，暴徒（Pöbel）のように振舞う読者とはそのようなものである，として彼がどのように手を切ったか，ということはなるほど知られてはいる。しかしながら次第に理性と一種の引かれ者の小唄がやはり募ってきた。シラーが自己の崇高な諸要求から逸

脱することを決して望まなかったのに対して，ゲーテに明らかになってきたのは，小さな利害に駆られて汲々としてもっと大きな社会生活をあのように全く欠いているドイツの読者に対して，「読者というものは，芸術家の内的生活および更なる発展に身を移すべきである」という要求をするのがもともと全く無理な話である，ということであった。そしてそれゆえ《温和なクセーニエ Zahme Xenien》に至るまで常に繰り返される彼の叡知の最後の結論および忠告は，「読者というものは，からかわれて然るべきだ」ということである。

ゲーテは例えば《ヴェネツィアのエピグラム》（第9連）において，「世の人々の心を揺り動かす」「狂信家」がもたらす胡散臭い「奇蹟を行なう絵」に現つを抜かして「精神と芸術の作品」を全く理解し得ない「追従の徒」である「愚民」の姿を類比的に描写することによって，読者への苛立ちを顕にしている[18]。

狂信家は　追従の徒を十分な数とし　世の人々の心を揺り動かすけれど
理性ある男は　愛する者ひとりひとりを数え上げる
奇蹟を行なう絵は大抵　稚拙な絵に過ぎない
精神と芸術の作品が存在するのは　愚民のためではない

Schüler macht sich der Schwärmer genug, und rühret die Menge,
Wenn der vernünftige Mann einzelne Liebende zählt.
Wundertätige Bilder sind meist nur schlechte Gemälde:
Werke des Geists und der Kunst sind für den Pöbel nicht da.

このように読者に対するゲーテの姿勢が厳しいものとなって行くとともに，イタリアで再生したゲーテを，かつてはあれほど深い親交を結んでいたシュタイン夫人（Charlotte Albertine Ernestine von Stein: 1742-1827）を始めとするヴァイマルの友人達が暖かく迎え入れなかった事情が重なって，ゲーテは精神的孤立状態にますます追い込まれて行く。この深刻な閉塞状況からゲーテを解放したのは，1794年7月下旬イェーナで開催されたある自然科学研究会に出席したことを契機として結ばれた他ならぬ詩人シラーとの交友であった。それまでの両者の関係は，自然認識における〈直観 Anschauung〉と〈概念 Begriff〉，〈経験 Erfahrung〉と〈理念 Idee〉，〈形式 Form〉と〈自由 Freiheit〉などを巡る根本的な思想上の対立によってゲーテが内なる命令から長い間に亙って慎重に回避してきた冷ややかなものであったが，会合の帰途に交わされた対話の中で両者がその対立点を鮮明に照らし出すことによって却って総合的に補完し合い並び立つ関係となることが今初めて可能となった。それゆえにこそゲーテはこの《幸運な出来事》――後年の随想《シラーとの初めての知遇 Erste Bekanntschaft mit Schiller》（1836-7年）が改題・改稿される前の随想（1817年）の表題――を，新たな春を迎える有機的自然と類比させて総括することが出来たのである[19]。

とりわけ私にとってそれは新たな春であった。その季節になってあらゆるものが朗らかに並び合って芽生え，種子や枝を開いて現われ出たのだ。私達双方の書簡がそのことについて最も直接的で純粋で完全なる証言を与えているのである。

ゲーテが自分と対等に話し合える相手としてようやく見出したシラーはその死の1805年に至るまで，文学・芸術に留まらない全人間的活動の領域においてゲーテがこれまで求めても得ることの出来なかった理想的な読者にして最も重要な助言者の役割を果たすことになる。1794年6月13日から1805年4月26（または27）日にかけての1013通にも及ぶ《ゲーテ＝シラー往復書簡集 Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe》は事実，十年に亙る意義深く緊張度の高い精神的－芸術的共同研究の実践の場であり，〈古典主義〉のみならずドイツ文学における最も実り豊かな成果のひとつと言えよう。ヘルダーが《イタリア紀行》以前のゲーテにとってとりわけ〈民謡 Volkslieder〉と〈バラーデ〉の詩の領域においてそうであったように[20]，この理想的な読者および助言者としてのシラーに寄せるゲーテの期待は1799年8月7日のシラー宛ての書簡に如実に現われている[21]。

庭園内の孤独のうちに，私は相当熱心に仕事を続けています。そして清書が同様に捗っています。まだ私自身，詩集がどのようなものになるであろうか，お話しすることは出来ません。次から次へと要求が生じてくるのです。私の現在の滞在は，今よりもっと単純素朴で曖昧模糊としていた[ヴァイマルにおける最初の]頃を私に思い起させます。

またこれらの詩そのものは多種多様な状態と気分を私に思い起させます。私が望むことはただ，落ち着いてともかく手近なことを行ない，それを次から次へと続けることだけです。

《[ヴェネツィアの]エピグラム》は韻律に関する限りでは，一番楽々と仕事が捗っており，幸運なことに最も容易に改善されています。その際，表現と意味するところはともにしばしば良くなっています。《ローマ悲歌》から私は韻律上の誤りを幾つも見つけましたし，運よく消し去ることが出来たと思っています。例えば《アレクシスとドーラ Alexis und Dora》のような熱の籠もった作品の場合の方が，事はなるほど難しいのですが，どの程度成功し得るか見届けなければなりませんし，最後には，友よ，あなたにその裁定を下してもらわねばなりません。このような改訂がただ部分的に実現されるに過ぎないとしても，人は常に自己の完成能力（Perfektibilivität）を示すのです。…

総じてこの詩集は上手く行くならば，幾多の意味でひとつの前進と見えるに違いないことでしょう。

「自己の完成能力」を発揮すべく詩集を編纂したゲーテにその詩群の成否の裁定を委ねられたシラーが8月9日，作品完成のための必要不可欠な前提として具体的に提示したのは，「内的必然性を持った思索」から紡ぎ出される真理内容と「韻律の純粋性」という感性形式とを詩において統合する「最も内なる芸術法則 die innersten Kunstgesetze」である。この提言は，芸術作品に対して〈美の規則 Schönseitsregel〉以外の何の自己弁明も認めない〈古典主義〉の詩人シラーにまさしく相応しい洞察であろう[22]。

詩群における韻律上の改訂，お祝い申し上げます。私達の見取り図（Schema）の最終条項である完成に必要なのは，異論の余地なくこの美点（Tugend）です。…韻律の純粋性については，それが内的必然性を持った思索を感性的に表現することに用いられる，という固有の事情があります。なぜならそれとは反対に，韻律に対して自由であること（Lizenz）は，ある種の恣意性（Willkürlichkeit）を感じさせてしまうからです。この観点からすれば，韻律はひとつの大きな要素であり，最も内なる芸術法則と触れ合うところがあります。現在の時点を考慮して言えば，優れた趣味に対して関心を抱いている人は誰しも，決定的な芸術的価値を有する詩群もまだこの規範に従っていることを喜ぶに違いありません。こうして凡庸さというものが最も良く克服されるのです。というのは正確なだけの韻文を創る以外の才能を持たず単に耳を働かせるだけの人も，あるいはまた自分を独創的であると見做すあまり韻律に対して然るべき配慮を向けることの出来ない人もともに，そのことによって沈黙させられるからです。

しかし韻律上の法則を設定することそれ自体がまだ必ずしも明瞭になっていませんから，完成する上で異論のある点がいくら努力しても常に残されていることでしょう。そしてあなたはこの事柄について，これだけ良くお考えになったのですから，前書きかあるいは然るべきところで，「原理からなされることは，単なる自由（Lizenz）や逸脱（Übertretung）と見做されるものではない」ということに関するあなたの諸原則を表明されるなら，それも悪くないかも知れません。

シラーのこの教育的とも言えるほどの厳格な態度に励まされたことに相前後して，ゲーテの読者に対する関係は新たな段階に入って行き，積極的というよりむしろ攻撃的な色彩を帯びたものとなる。この攻撃的な姿勢を持った最も辛辣で的確な表現は，1797年ゲーテがシラーと共同執筆した二行詩（Distichon）形式の《クセーニエ Xenien》であり，〈啓示宗教 Offenbarungsreligion〉の典型であるキリスト教の立場に固執するシュトルベルク伯（Friedrich Leopold Graf zu Stolberg: 1750-1819）を始めとして，文学上彼等の共感を呼ばない同時代人達が完膚なきまで攻撃の的に曝された[23]。これと並んで，読者を教化しようとする意図の下に刊行されたのが，ゲーテも編集に協力したシラー主宰の文学雑誌《ホーレン Horen》（1794-7年）およびゲーテ主宰の芸術雑誌《プロピュレーエン Propyläen》（1798-1800年）である。これらの雑誌は，〈古典主義〉の芸術理念が持つ厳しい法則の下に読者を服させ教育しようとする使命を担う意欲的なものであった。とはいえゲーテは，造形芸術ならびに芸術一般，および芸術家の普遍的自己形成に関する考察を《プロピュレーエン》誌の主眼に据えることを提唱した《プロピュレーエンへの序言》（1798年）の中では，広く一般読者を募るというその《序言》自体の性格のためか，読者による芸術家批判に個々の芸術家の自己形成や芸術そのものの発展史における積極的な役割を付与することによって，芸術家と読者の望ましい関係を両者の時間的成長と空間的拡大に絡む生産的な交互

作用として肯定的に方向付けている[24]。

> 芸術と学問の場合にはしかし…読者との関係もまた有益であり必要なものとなる。およそ私達が考えたり行なったりする普遍的なことは，世界に属している。世界が個人の様々な努力から利用し得るものを，世界は自ら成熟させもする。作家が覚える拍手喝采への願望は，彼をもっと高い境地へ誘うために自然が彼の心に植え付けた衝動である。作家は栄冠を既に獲得したと思うと，世間の寵愛——これは恐らく幸運や偶然によっても一時的には獲得され得るものである——を確保するためには，あらゆる生来の才能を今以上に陶冶しなければならないことにまもなく気づくのである。
> 世に出た頃の作家にとって読者との関係はこのように重要であり，後の時代になっても彼はこの関係を欠くことは出来ない。作家は他人に教えを垂れる使命を持ってはいないにしても，自分と志を同じくしていて広い世界に散在している多くの人々に自分の気持ちを打ち明けたいと願う。つまりこれによって彼は最も古い友人達との関係を再開して，新しい友人達との関係を継続し，晩年には自分の余生のために再び別な人々を獲得したいと願うのである。作家は自分自身が踏み迷った回り道から若い人々を逃れさせ，現在という時の長所を認めて利用しつつ，過去の功績に満ちた努力の追憶を保持したいと願うのである。

以上考察してきたように，読者に対して基本的に厳しいゲーテの態度は，読者の嗜好に安易に迎合するのではなく，自己の内面的要求にあくまでも誠実であることによって時代と世界を切り拓いて行こうとする高い志を持った詩人の宿命そのものと言ってよいであろう。そしてゲーテの意識の中に想定されていた現実の読者とは，不特定の量的なものに還元される抽象的な読者一般では決してなく，シラーをその理想的な読者像として，書簡や対話を通して精神的な交わりを直接育むことの出来る個人的に親しい特定化された知人・友人達に限られていた。畢竟それはゲーテにとって，現実の自己をありのままに映し出し反省を促す重要な契機となる時間と空間の鏡に他ならなかったのである。

Ⅱ．詩《好意ある人々に寄す》における二重性

本章では，詩《好意ある人々に寄す》の内容に即して，詩人ゲーテが敢えて「好意ある人々に寄す」という表題を冠してこの詩を読者に訴え掛けた創作意図について具体的に探ってみたいと思う。

第一連においては，詩人の自己表出の内面的欲求と，そこから産み出され外在化された作品を受容する者としての読者に対する詩人の意識，および作品を読者に公表することの結果として避け難く巻き起こる「賞賛」と「非難」という相反する反響が歌われている。一般的に作者・作品・読者という三つの要素から成立している文学という現象をこの詩に具体的に当て嵌めれば，〈リート〉を歌う詩人である「私」，「散文」を否定した上で〈リート〉形式で歌われるこの詩の内容そのもの，および詩人が想定している読者である「世の人々」が三要素を形成している。詩人が押え難い内面的欲求から詩を先ず歌って書き，次いでこれを世間に公表し，最後に読者がそれを受容・鑑賞するという文学の一般的経緯においては，世間に発表するまでは詩人個人のものにあくまでも属する詩は，その発表を契機として詩人の手許を離れるや，広く読者全体の共有財産となり，それ自体自立した客観的存在となる。そして詩人もまた自己の作品を受容するひとりの読者であるという視点を踏まえながら，再び作品をより優れたものへと変えて行く。このような作品の生成過程は，前述のゲーテ＝シラーの書簡からも充分汲み取られる通り，とりわけ〈リート集〉編纂の渦中にあったゲーテの意識に当然明確に呼び覚まされたことであろう。つまり詩集の編纂を契機として成立したこの詩は，詩人が限られた狭い仲間の中で詩を発表して親交を深めることに終始するという主観的な自己満足の意識から創作された普通の意味での個別的な詩ではなく，詩人が広く読者大衆にそのような詩を発表する結果として，好むと好まざるとにかかわらず巻き起こされる避け難い「賞賛」と「非難」に真摯に耳を傾けて，その反響を我が身に引き受けようとする詩人の客観的な反省意識そのものから産み出され，個別的な詩について普遍的に総括する詩という二重構造を持った独自の性格を担うものなのである。従ってこの詩はいわば「詩についての詩」あるいは「メタ詩」とも言っても過言ではないだろう。

ゲーテ自身の目に映った具体的な読者である「世の人々」に関して，フィッシャー（Paul Fischer）はその著《ゲーテ語彙辞典》の中で，「ゲーテはこの言葉を蔑まれた意味で，教養人あるいは自己形成に勤しむ人々（die Gebildeten oder Bildungsbeflissenen）と対立するものとしてしばしば用いている」と否定的な意味で解説し[1]，その実例として《温和なクセーニエ

I－VI》の一節を挙げている[2]。

「世の人々に逆らおうとする者など　いるのだろうか」
私は彼等に逆らわない　私は彼等を放っておく
彼等はふわふわ漂ってはあちこち動き　ゆらゆら揺れてはぶんぶん飛び回った挙げく
ようやく　纏まりを取り戻すのだ

《Wer will der Menge widerstehn?》
Ich widerstreb ihr nicht, ich laß sie gehn.
Sie schwebt und webt und schwankt und schwirrt,
Bis sie endlich wieder Einheit wird.

このようにゲーテは書物の世界を無定見に跳梁跋扈する「世の人々」たる一般読者に対して黙殺・無視の態度を取るか，《ヴェネツィアのエピグラム》におけるように「愚民」として断罪する他なかったのに反して，1815年に成立した〈リート集〉(《ゲーテ全集》第一巻《詩集》所載）の冒頭に掲げられた《予めの訴え》(第二連)においては，ゲーテ自身の時熟を示すかのように，「一生の間互いに／長く遠く離れ合っていたものが／今や一枚の表紙の下に／良き読者の手に渡る Was eine lange, weite Strecke／Im Leben voneinander stand,／Das kommt nun unter Einer Decke／Dem guten Leser in die Hand.」と歌われている通り，もはや単なる読者一般ではなく，《好意ある人々に寄す》という詩の表題そのものと同一表現と言ってよい「良き読者」の存在が詩の中に明言されている[3]。しかしこの表現についてデュンツァー (Heinrich Düntzer) は，「ゲーテの心から流れ出た詩歌を冷ややかに無関心に手に取るであろう良き読者」と註釈を加えており，この「良き読者」という表現に露呈している読者に対するゲーテの姿勢は「諧謔的 humoristisch」であると指摘している[4]。つまり「好意ある人々」たる「良き読者」という言葉は，作品を受容する読者――一般読者であろうと，「自己形成に勤しむ」選び抜かれた読者であろうと――から見れば，自分を直接名指しして詩人が訴え掛けてくれているのだというまるで「自分が網に掛かったみたい」な意識を持たせる両義的な解釈を許すものであり，二種類の読者に何ら異和感を覚えさせない双貌の〈ヤヌス Janus〉的表現となっている。それゆえにこそこの言葉は，ゲーテ自身にとってあるいは読者に対する彼の厳しい姿勢を知悉する人々にとってのみ，「諧謔的」に響く〈反語 Ironie〉が籠められた表現なのである。この意味でゲーテは後年，イタリア・ロマン主義の詩人マンゾーニ(Alessandro Manzoni: 1785-1873) の悲劇《アデルキ Adelchi》(1822年)に触れて語った「抒情詩は最高の修辞学である」という見解をこの実作において既に実践したものと言ってよいであろう[5]。

抒情詩人には…何かある主題を，つまり何らかの重要な出来事の状態あるいはまた経緯を朗読してもらいたいのだが，それは，聴衆がこれに完全なる関心を抱いて，そのような朗読に巻き込まれながら，自分が網に掛かったみたいに直接関与しているのだと感じるような流儀でなのだ。そしてこの意味でなら私達は…抒情詩は最高の修辞学であると名付けてよい…。

第一連四行目の詩句「散文で告白するのは　誰しも好まない」については，詩人が自己の真情を吐露する「告白」という主題の上で，《西東詩集》の〈歌人の書〉の六番目に収載されている《告白》と題された詩(1815年5月27日)との関連が指摘されている[6]。

隠し難いものとは何だろう　火だ！
というのも　昼は煙が立って　それと分かるし
夜には　もの凄い炎が出るから
更に隠し難いものは　愛だ
どれほど心密かに育もうとも
愛は　実に容易く両の目から湧き上がる
最も隠し難いものは　一篇の詩だ！
詩は　そっと包み隠されるものではない
生き生きと詩を歌ったなら
詩人はすっかりそれで充たされている
気持良く優美に詩を書き上げたなら
詩人は世の全ての人々に　その詩を愛してほしいと願う
詩人は詩を　ひとりひとりに朗らかに声を上げて読み聞かせる
詩が我々を悩ませようとも　励まそうとも

Was ist schwer zu verbergen?　Das Feuer!
Denn bei Tage verrät's der Rauch,
Bei Nacht die Flamme, das Ungeheuer.
Ferner ist schwer zu verbergen auch
Die Liebe; noch so stille gehegt,
Sie doch gar leicht aus den Augen schlägt.
Am schwersten zu bergen ist ein Gedicht;

Man stellt es untern Scheffel nicht.
Hat es der Dichter frisch gesungen,
So ist er ganz davon durchdrungen;
Hat er es zierlich nett geschrieben,
Will er, die ganze Welt soll's lieben.
Er liest es jedem froh und laut,
Ob es uns quält, ob es erbaut.

「〜し難く schwer」・「更に〜し難く ferner ~ schwer」・「最も〜し難く am schwersten」という副詞の比較表現を畳み掛けることによって，「隠し難いもの」の存在が「火」・「愛」・「詩」という風に順次明らかにされるこの詩では，《好意ある人々に寄す》第一連の一・二行目と同様に，詩人の押え難い自己表出の内面的欲求と，そこから成立する詩を受容する読者の存在に対する意識とが歌われている。《好意ある人々に寄す》では「散文（の告白）」が否定的な形で挙げられるに留まっているのに対し，《告白》の方では「詩」の存在が極めて肯定的な形で明言されている。更にまた《好意ある人々に寄す》では「リート」という詩の表現形式のひとつが挙げられているが，《告白》の九行目以下では「歌う」・「書く」・「読む」という三段階の詩の創出過程の形態が漸層的に歌い込まれており，詩というものが「書か」れて「読ま」れる視覚の領域のものである以前に，何よりも先ず声に出して「歌わ」れる聴覚の領域のものであることを深く銘記させている。例えば1807年5月20日（または7月9日）ラインハルト伯爵夫人（Christine Gräfin von Reinhard: 1773-1815）は，バラーデや何がしかの筋を含んだ詩を好んで朗読した時のゲーテの様子について，「彼の声は低くて力強く，抑揚能力に優れています。これに彼の眼差しと身振りの表現が付け加わるのです」と実母に伝えている[7]。晩年のゲーテの秘書を務めたエッカーマン（Johann Peter Eckermann: 1792-1854）もまた1824年3月30日ゲーテが未印刷の詩の原稿を朗読した時の様子について，「彼の声に耳を傾けるのは，全く独特な楽しみだった。というのもそれらの詩の独創力と新鮮さが私を大いに刺激したに留まらず，ゲーテが朗読に際して，私がこれまで知らなかった極めて重要な一面をも見せてくれたからである。その声の持つ何という多種多様さと力強さ！ 皺だらけの大きな顔の何という表情と生命！ そして何という眼差し！」と賞賛を極めている[8]。いずれにせよどちらの詩も，ゲーテが聴覚に訴え掛ける「詩」あるいは「リート」の価値を視覚に訴え掛ける「散文」に対峙させて高く評価しているという点で，また詩人の詩の創造の秘密を打ち明けることによって自己の詩の存在理由を自己弁護する「告白」の詩であるという点で通底していると言ってよい。

第一連五・六行目の「だが　私達はしばしば　薔薇の花に隠れ／詩神達の静かな杜の中で　心を打ち明ける」という表現の中の「薔薇の花に隠れ sub rosa」というラテン語源の語句について，グリム兄弟（Jacob Grimm: 1785-1863, Wilhelm Grimm: 1786-1859）の《ドイツ語辞典》では次のような由来が記述されている[9]。

> 他方で薔薇は沈黙および秘密の象徴である。そのようなものとして薔薇は修道院内の集会用広間の天井や告解聴聞席に備え付けられていた。天井に一本の薔薇が描かれていたブレーメン市参事会の地下食堂の一室は，そのために〈薔薇の間 Rose〉とさえ呼ばれた。…従って〈薔薇の下で話す unter der Rose[n] reden〉という慣用句は〈内密に im Vertrauen〉，〈緘黙の封印の下に unter dem Siegel der Verschwiegenheit〉，また十五―十七世紀の言語において大いに頻出するラテン語の〈sub rosa〉という語句で説明が付く。…この慣用句が上述の慣習によるのか，中世の秘密結社に由来するのか，あるいは薔薇の花冠で頭を飾った愉快な飲み仲間の打ち解けた会話に由来するのかは，決められない。

またシュタイガー（Emil Staiger）はこの「薔薇の花に隠れ」という語句を「秘密厳守して in strengstem Vertrauen」と解釈し，ローマ神話に遡る起源を更に提示している[10]。

> この慣用句はクピード（Cupido）の伝説に遡る。クピードはハルポクラテース（Harpokrates）に一本の薔薇を与えて，ヴェーヌス（Venus）の起こした恋愛沙汰について沈黙を守るよう指示した。そういうわけで薔薇は沈黙の寓意となり，宴会用広間の天井に鑿で彫り込まれて，「〈酒を酌み交わしながら sub vino〉 語られたことは，〈神の御許で sub divino〉 漏らされてはならない」ということを客達に思い起させた。

このように古代ローマの饗宴において緘黙の封印の下に食卓の上の天井に彫り込まれた「薔薇の花に隠れ」つまり人知れず内密に，詩人達が集う場所である「詩神達の杜 Musenhain」という広く人口に膾炙した言

葉を，ゲーテが古代ギリシア・ローマの文学的伝統を踏まえつつ活用したことは明らかである。例えばギリシアの哲学者プラトン（Plato: 前427-347）の初期対話篇《イオン Ion》では，ソクラテスが高名な吟誦詩人イオンにこう語り掛ける。「…周知のように詩人達は私達に，『蜜蜂が蜜を吸って君達のところに運んで行くように，自分達もまた蜜蜂さながらに飛びかいながら，［ムーサの女神の］不可思議な庭園や谷間の蜜の流れる泉からその詩歌を吸って，君達のところに運んで行くのだ』と語っている…」[11]。またローマの古典詩人ホラーティウス（Quintus Horatius Flaccus: 前65-前8）の《歌章 Carmina》（第3巻第4章5-8節）では，「[歌声が]聞こゆるか。あるいは，うれしき惑乱がわたしを欺いているのか？ わたしには[歌声が]聞こえ，快き流れと微風と注ぐ聖き杜の中をさまよう思いがする」と歌われている[12]。更にまた「詩神達の杜」を用いた近代の文学作品の顕著な例としては，《丘と杜 Der Hügel und der Hain》という表題を持つ〈頌歌 Ode〉を創作した啓蒙時代の詩人クロップシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock: 1724-1803）が「杜」を「古代ケルト族の吟誦詩人が歌う詩歌 Bardengesang」の名称に利用したこと，またそれに因んで，クロップシュトックを熱烈に崇拝するゲッティンゲンの若き詩人達が1772年9月12日，周りを取り囲んでいるオークの杜（Eichenhain）を指して，自ら〈ゲッティンゲン杜の詩社 der Göttinger Hainbund〉という名称を名乗ったことが挙げられよう。光と文芸・音楽の神アポロン（Apollon）や詩の女神ムーサ（Muse）が籠もったと伝えられるパルナス（Parnaß）山に対抗して，〈ゲッティンゲン杜の詩社〉の詩人達が「杜」をドイツの吟誦詩人達の住処の意味として用いたのと同様，ゲーテが「杜」を単に詩神達の住む「杜」のみならず，限られたあるいは選び抜かれた親しい友人達の集いを具体的に思い描いていたことは想像に難くない。事実この集いは，1801年10月以来二週間毎にゲーテの家で催される〈ヴァイマル水曜会 die Weimarer Mittwochsgesellschaft〉として結実し，《イタリア紀行》中のゲーテが知り合ったスイス人画家にして芸術理論家のマイアー（Johann Heinrich Meyer: 1760-1832）やシラー夫妻を始めとするゲーテの文学・芸術活動に多大な影響を与えた人々が参加する読書会へと発展を遂げた。トゥルンツは文学が現象する場としての〈水曜会〉におけるゲーテと友人達との実り豊かな交互作用を描いている[13]。

ゲーテが朗読する時，それは小さな集いの中で行なわれた。彼は朗読するのに相応しいものを選んだ。文学はここでは社交の要素であった。…朗読は時として彼の創作に影響を与えたようである。ヴァイマルの水曜会は彼に，この集いで朗読したり歌ったりするのに相応しい詩を創るようにと励ました。

第二連三行目の「花束」とはこの詩では，ひとつひとつの〈リート〉を結び合わせてひとつの全体である〈リート集〉としたものであるが，本来「花束」というのは，自然に咲く一本一本の花を手折って，リボンなどでひとつに纏めたそれ自体既に極めて人為的な文化形式である。従って自然の一本一本の花に相当する「迷い」や「努力」――《ファウスト》の〈天上の序曲〉における神の科白「人間は努力する限り，迷うものだ Es irrt der Mensch, solang' er strebt.」（317行目）が容易に想起される[14]――，「悩み」や「生」というひとつひとつの人間の赤裸々な体験を直接的にそのまま歌い上げるのではなく，「花束」つまりは〈リート〉という詩の形式に則って歌うことが，ゲーテの創作意図であったと思われる。ゲーテは例えば歌唱劇《エルヴィーンとエルミーレ Erwin und Elmire》（第一版 1775年）をその序詩の中で，自分の心から摘み取って結んだ「小さな花束 der kleine Strauß」と呼んでいる[15]。また完成した《ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 Wilhelm Meisters Wanderjahre》第二部（第二版 1829年）を，纏めて完全に縫い合わせる藺草が殆ど要らなくなった「花束の環 Straußkranz」と呼んでいる[16]。つまり，ゲーテが後年詩《ソネット Das Sonett》（1807年）において技法を駆使した他ならぬ〈ソネット〉形式に載せてその形式が孕む問題性を鮮やかに歌い上げたように[17]，ここでは〈リート〉形式に則って歌うことによって，自己の様々な体験を吟味するという反省の意識が既に介在しており，詩の内容と形式を調和させることによって，本来主観的なものである体験を客観化させようとする高次な目的が目指されているのである。そしてそのことは畢竟，詩に内在する生命の永遠性を保証することに繋がって行く作業でもあると言ってよい。この意味をも含意して歌われる終わりの三行はそれのみならず，〈リート集〉の編纂に際して多種多様な〈リート〉に目を通して再吟味したゲーテの心を深く捉えた「ある種の普遍的な気分」に根差している。それは個別的には，かつての過ぎ去った豊饒な「青春」の回想と，諦念に染まりつつ確実に迫り来る「老齢」の未来とに鋭く挟撃さ

れた「生」の現在に対する詩人の時間意識であり，その時々に体験された数々の「欠点」や「美点」に対する様々な苦渋と幸福の感情である。しかし〈リート集〉の編纂を重要な契機としてそれらの体験を反省する機会を与えられた今や，ゲーテはひとつひとつの事象をあげつらうのではなく，〈リート〉という巧まざる詩形式に則って歌われた「生」をひとつの全体として大きく肯定するという普遍的な姿勢を明言する。この姿勢こそは，最晩年の詩《リュンコイス Lynceus》（《ファウスト》第二部第五幕〈深夜〉11300-4行目）において「お前　幸福なる目よ／かつてお前が目にしたものは／どんなものであろうとも／さすがに美しかったのだ Ihr glücklichen Augen,／Was je ihr gesehn,／Es sei wie es wolle,／Es war doch so schön!」と明確に結論付られている通り[18]，〈目の詩人〉ゲーテが生涯に亙って終始貫き通した固有の姿勢であった。

1781年4月下旬ゲーテはシュタイン夫人宛ての書簡の中で，「自分の心の中に常に生じることを，余韻を残す〈リート〉に乗せて簡潔に表現する天分を神々が私に与えて下さったことに対して，私は感謝しております」[19] と語ったことがある。ゲーテの心を一生涯捉えて離さなかったこの〈リート〉の特徴を，トゥルンツは「ゲーテの本質にとりわけ相応しい形式」と規定した上で，それが歌われることを前提とした「魂の統一の取れた音調」という秩序ある形式と，詩人の感受性溢れる本源的な生命感情を育む「心 Herz」――冷静な理性に統御された「精神 Geist」ではない――から吐露される「悩み Leid」と「苦しみ Schmerz」が満たす自己の世界の真理内容との両面に亙って分析している[20]。

> 〈悲歌〉や〈エピグラム〉が一時期ゲーテの抒情詩の本質的内容をどれほど表現していたとしても，それらは彼の本質にとりわけ相応しい形式を一度も排除することは出来なかった。その形式とは，〈リート〉，およびこれに近くて詩節（Strophe）に分かれ韻を踏んだ詩である。ゲーテはこれらの形式をシュトラースブルクの時代から老齢に至るまで利用した。…それらのうちの多くのものはやがて作曲され，ゲーテはそれらが歌われることを好んだ。どの〈リート〉も，内的な変化や反語的な（ironisch）屈折を持った詩とは反対に，魂の統一の取れた音調に合致している。詩節は単純であり，文と詩行（Vers）は互いに対応している。音声が小さな間を取るところで，詩行は終わり，音声が比較的長い間を取るところで，詩節が終わる。音（Klang）の秩序は秩序だった世界を象徴化している。この秩序だった世界に不可欠なのはまた，悩みと苦しみである。そして〈リート〉においてこのことを精神よりも早くそして深く感じ取っているのは，心なのである。

全体的に見通してみると，詩《好意ある人々に寄す》は，自己表出の押さえ難い内面的欲求とその表現能力とが幸運にも重なり合った詩人が，「世の人々」である一般読者という姿の見えない正体不明の鵺のような存在を前にして戸惑いを見せ深く傷つきながらも，表層においては敢えてそのような読者大衆に対して，深層においては「好意ある人々」である「自己形成に勤しむ」選び抜かれた読者に対して，つまりは二層の読者に対して，自己の詩の存在理由とその弁明の試みを他ならぬ〈リート〉という巧まざる詩形式に則って歌い掛けるという二重構造を持つ「告白」の詩であると思われる。それゆえにこそ《箴言と省察》（77番）において，詩人ゲーテ畢生の重要不可欠な概念である人間の〈自己形成 Bildung〉における発展段階を充分配慮しつつ晩年に語られた次の見解は，シラーを「良き読者」の理想像とする「好意ある」読者に対するゲーテの姿勢を端的に表明した最終的な結論であると言えよう[21]。

> 作家が自分の読者に対して抱くことの出来る最大の尊敬の念とは，彼等が期待するものを作家がもたらすということでは決してなく，作家自身が自分および他の人々の自己形成の諸段階に応じて正しくかつ有益だと思うものをもたらすということなのである。

そしてこの見解において望見されるのは，詩人と読者との個別的な現在の関係を既に超克して，読者が親しむ文学をその典型的現象とする文化が深く根付く土壌としての社会即ち世界と，自己との緊張を孕んだ普遍的で実り豊かな交互作用――これが発揮される領域こそは，個別的な国民性と個性とを通して初めて現われる普遍的な〈世界文学 Weltliteratur〉に他ならない――を未来に向けて構想する〈目の詩人〉ゲーテの遼遠たる眼差し，つまりは「世界および世界に関わる全てを見通す自由な眼差し」なのである[22]。

註

I

1) J.W.v.Goethe: An die Günstigen. In: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe (HA). Bd.1. S.244.

2) ゲーテ自身の編纂による五回に亙る全集の詩の巻の成立過程に関する記述は，上記書の註釈に概ね依拠している。Erich Trunz: Anmerkungen des Herausgebers. In: HA. Bd.1. S.411-39.

3) Brief von Goethe an Schiller. Weimar, am 3.August 1799. In: Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe (BW). insel taschenbuch 250. S.791-2.Nr.633.

4) Brief von Schiller an Goethe. Jena, 6.August 1799. In: BW. S.792-3. Nr.634.

5) Erich Trunz: a.a.O. In: HA. Bd.1. S.433.

6) J.W.v.Goethe: Faust. Eine Tragödie. 1.Teil. In: HA. Bd.3. S.7-145.

7) Gespräch mit Johann Anton Leisewitz. 14.August 1780. In: J.W.v.Goethe. Gedenkausgabe (GA) der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bden. Bd.22. S.130-1. Nr.188.

8) J.W.v.Goethe: West-östlicher Divan. Buch des Sängers. Selige Sehnsucht. In: HA. Bd.2. S.18-9.

9) Erich Trunz: Anmerkungen des Herausgebers. In: HA. Bd.10. S.621.

10) Brief von Goethe an Jacobi. W[eimar] d.12.Jul.1786. In: Goethes Briefe. Hamburger Ausgabe (HA) in 4 Bden. Bd.1. S.515. Nr.407.

11) Karl Robert Mandelkow: Anmerkungen des Herausgebers. In: Goethes Briefe. HA. Bd.2. S.518. Nr.491.

12) J.W.v.Goethe: Zueignung. In: HA. Bd.1. S.151. Z.65-72.

13) Martin Sommerfeld: Goethe und sein Publikum. In: Goethe in Umwelt und Folgezeit. Gesammelte Studien. Leiden 1935. S.261.

14) Brief von Goethe an Johann Freidrich Reichardt. W[eimar,] d.28.Febr.90. In: Goethes Briefe. HA. Bd.2. S.120-1. Nr.491.

15) Brief von Goethe an Georg Joachim Göschen. W[eimar,] d.4.Juli 1791. In: Goethes Briefe. HA. Bd.2. S.140-1. Nr.511.

16) Erich Trunz: a.a.O. In: HA. Bd.1. S.431.

17) Albert Köster: Goethe und sein Publikum. In: Goethe-Jahrbuch. Bd.29. 1908. S.14＊.

18) J.W.v.Goethe: Venetianische Epigramme. In: HA. Bd.1. S.176.

19) J.W.v.Goethe: Glückliches Ereignis. In: HA. Bd.10. S.538-42 und S.758-9.

20) 拙稿『ゲーテの詩《魔王》――〈伝承バラーデ〉から〈創作バラーデ〉へ――』(大谷大学・大谷学会『大谷学報』 第70巻第1号 平成4年5月20日 17-37頁)を参照されたい。

21) Brief von Goethe an Schiller. Weimar, am 7.August 1799. In: BW. S.793-4. Nr.635.

22) Brief von Schiller an Goethe. Jena, 9.August 1799. In: BW. S.794-6. Nr.636.

23) 拙稿『ゲーテにおける宗教と芸術――プラトンの初期対話篇《イオンを巡って》――』 (島根医科大学『島根医科大学紀要』 第17巻 平成6年12月 1-20頁)を参照されたい。

24) J.W.v.Goethe: Einleitung in die Propyläen. In: HA. Bd.12. S.40-41.

II

1) Paul Fischer: Goethe-Wortschatz. Leipzig 1929. S.429.

2) J.W.v.Goethe: Zahme Xenien I - VI. In: GA. Bd.1. S.607.

3) J.W.v.Goethe: Vorklage. In: GA. Bd.1. S.15.

4) Heinrich Düntzer: Goethe's Lyrische Gedichte. In: Erläuterungen zu den Klassikern. Bd.61-73. 3 Aufl. Leipzig 1896-98. Bd.64. S.30.

5) J.W.v.Goethe: Adelchi, Tragedia. Milano 1822. In: GA. Bd.14. S.840.

6) J.W.v.Goethe: West-östlicher Divan. Buch des Sängers. Geständnis. In: HA. Bd.2. S.11.

7) Brief von Christine Gräfin von Reinhard an ihre Mutter. 20.Mai／9.Juli 1807. In: GA. Bd.22. S.462-4. Nr.742.

8) Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe. Dienstag, den 30.März 1824. insel taschenbuch 500. S.97-100.

9) Jacob und Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Bd.14. S.1179-80.

10) J.W.v.Goethe: Gedichte. Mit Erläuterungen von Emil Staiger. 3 Bde. Zürich 1949. Bd.1. S.431-2.

11) 拙稿『ゲーテにおける宗教と芸術――プラトンの初期対話篇《イオン》を巡って――』を参照されたい。

12) ホラーティウス『歌章』(現代思潮社 藤井昇訳 1973年 124頁)

13) Erich Trunz: a.a.O. In: HA. Bd.1. S.431.

14) J.W.v.Goethe: Faust. Eine Tragödie. Prolog im Himmel. In: HA. Bd.3. S.18.

15) J.W.v.Goethe: Erwin und Elmire. In: GA. Bd.4. S.806.

16) Brief von Goethe an Zelter. Weimar den 24.Mai 1827. In: Goethes Briefe. HA. Bd.4. S.233. Nr. 1365.

17) 拙稿『ゲーテの詩《自然と芸術》――〈形成〉の意味するもの――』(大谷大学文学科研究室『西洋文学研究』第12号 平成3年12月25日 1-30頁)を参照されたい。

18) J.W.v.Goethe: Faust. Eine Tragödie. 2.Teil. 5.Akt. Tiefe Nacht. In: HA. Bd.3. S.340.

19) Brief von Goethe an Charlotte v.Stein. Weimar, Ende April 1781? In: Goethes Briefe. HA. Bd.1. S.355. Nr.271.

20) Erich Trunz: a.a.O. In: HA. Bd.1. S.605 und S.426.

21) J.W.v.Goethe: Maximen und Reflexionen. Text der Ausgabe von 1907 mit den Erläuterungen und der Einleitung Max Heckers. insel taschenbuch 200. S.35. Nr.77.

22) J.W.v.Goethe: Plato als Mitgenosse einer christlichen Offenbarung. In: HA. Bd.12. S.247.

(受付 1995年9月27日)